

案内人のあわせ

宮古はるか



案内人のあわせ

しあわせの案内人

宮古はるか

もくじ

プロローグ 4

1. えらくなりたいたい 9
2. こどものままでいたいたい 31
3. よくわからない 57



ネコのアンノウン 80

4. わるい人がいなくなりますように 85

5. どうだっていい 109

エピローグ 130

この本を読んでくれたみなさんへ 139



プロローグ

〈ヴォーン、ヴォーン……〉

今日も大きな古時計が手紙の来る時間をしらせた。午前0時。案内人は立ちながら飲^のんでいた紅茶^{こうちゃ}をキッチンのテーブルに置^おき、ポストのあ^ある方角を見た。

「さて、今日はどんな手紙が来ているかな」

案内人はいつもこの時間を心待^{こころまち}ちにしていた。なぜなら、こどもたちの夢^{ゆめ}が届^{とど}けられる時間だからだ。音を立てて古い木の扉^{とびら}を開^あけ、夜のポストへと向^むかう。



今日もポストにはたくさんの手紙が届いていた。案内人はこどもたちからの手紙を両手に抱え、こぼさないように注意しながら家の中へと運び込んだ。玄関の次にあるホールのような広い部屋には大きな四角い木の机がある。その机に手紙を置き、「ふうー」と一息つくくと、案内人は一枚一枚を大切そうに両手で持つて手紙を読みはじめた。

「ぼくのゆめは、げいのうじんになることです」

「わたしはしょうらい、おはなやさんになりたいです」

案内人は頷きながら手紙を読んだ。手紙を読むことは案内人の仕事だ。でも、本当の仕事ではない。手紙を読んでこどもたちの夢を知ることとは、本当の仕事の準備のようなものだ。

では、案内人あんないにんの本当の仕事しごととはなんなのか？

「今日は三人」

案内人はそつとつぶやいた。案内人が持つている三通つうの手紙にはそれぞれこう書いてあった。

「ぼくは、えらくなりたいです」

「わたし、よくわからない」

「ぼくのゆめは、こどものままでいることです」



案内人はこの三通の手紙を持って二階かいの自室じしつに向かい、クローゼットの中からカバンを取り出して、その中に手紙を入れた。案内人の部屋へやは、ホールのような一階の部屋に比べ、質素しつそで小さかった。クローゼット

トのすぐ隣となりにはベッドがあり、案内人はカバンをベッドの上に置おいて、上着うわぎをクローゼットから出してはおり、ネクタイをしめた。最後さいごに、ぼうしをかぶる。これから本当の仕事に出かけるのだ。案内人の出かける先は、手紙をくれたこどもたちの夢ゆめのなか。



1.
えらくなりたい



案内人は最初に「えらくなりたい」と手紙に書いていた男の子の夢の扉をノックした。なかから男の子が「だれー？」と尋ねる。

「しあわせの案内人といえます。扉を開けてくれませんか」

案内人はいつものようにそう言った。

「あんないになん？」

扉を開けたのは、小学二年生くらいの男の子だった。まるい大きな黒い瞳に、栗色の髪を持つ男の子だ。

「こんばんは。お手紙読ませてもらいましたよ」

案内人はぼうしを取り、男の子に挨拶した。白髪の頭に、目じりには深いシワ。そして白いちよびひげ。服は濃い緑のスーツだ。男の子はその姿を物珍しそうに見た後、案内人を夢の扉のなかに入れてくれた。

「手紙ってなんのこと？」

男の子の夢のなかは空の上のようで、二人は適当な雲の上に腰かけて話しはじめた。

「君の夢のお手紙です」

案内人は持つてきたカバンから、手紙を取り出して男の子に渡した。

「あ！ これぼくが学校で書いたやつだ。どうしておじいさんが持つてくるの？」

案内人は「それは教えられません」と言った。こどもたちみんなの夢が、案内人のポストに届いていることは、秘密なのだ。

「わたしは君の将来の夢をもう一度確かめたくて、ここに来たんです」

案内人は微笑みながら言った。男の子は目をぱちぱちと瞬いて、案内人の顔を見ている。



「どうして、君はえらくなりたいたいのですか？」

案内人はゆったりと落ち着いた口調で尋ねた。男の子はえーつと、と上を見ながら考える。

「社長とかさうり大臣とか、えらい人ってすごいなーって思うから。ぼくもみんなにすごいなーって思われたい」

男の子が言うと、案内人は顔をシワでいっぱいにしてにっこりと微笑んだ。「そうですか。じゃあ、どうして君は